



## 23春闘 各支部見解が発出!

見解にダイレクトアクセス



### 23春闘のたたかいに向けた木更津支部見解

私達は、新型コロナウイルス感染症の猛威の中で、組織再編に伴う統括センター化や、ワマン運転などの各種施策に向き合い、安全・安定輸送に努めてきた。しかし、夏季手当・年末手当のたたかいで本体・JESS・バス関東の仲間に示された回答は過去最低の数字であり到底納得できるものではない。黒字化に向けて職場で奮闘してきた組合員の努力に向き合わないばかりか、私達の生活を無視した会社姿勢として捉えている。職場では、逼迫する要員問題やワマン運転などの施策による業務量の増加、キャリアプランを無視した異動といった問題が発生しており、そうした中で、多くの苦勞を重ねながら業務を行い、JR東日本の安全を守っている。職場の努力があってこそ黒字化であり、会社は今一度社員に向き合うべきだ。組合員からは、「年末手当2.4ヶ月では生活できない」「業務量が増加しているのに、過去最低の回答では納得できない」「物価高で生活が厳しく、黒字なのに手当を上げないのはおかしい」など、怒りの声が支部に寄せられている。

会社は21春闘で「昇給係数2・ペアゼロ」と定期昇給のカットを行い、22春闘で「昇給係数4・ペアゼロ」の回答を受け、夏季手当、年末手当のたたかいを通じ、支部として「生活実感」「労働実感」に対する組合員の意見を集約し、本部・地本・分会と連携して要求実現に向けてたたかいをつくり出してきた。しかし、組合員の苦しい現実とは裏腹に、社友会によって「年末手当が、夏季手当の2.3ヶ月より0.1ヶ月増えて良かった」「思ったよりもらえて良かった」といった社内世論が形成された。

しかし、そうした声が果たして本当なのか？未加入者からの声として、

- ・「年末手当が夏季手当より0.1ヶ月増えたから良かったなんて思っています」
- ・「コロナ禍の中でも今まで以上の仕事をしてきたのに、毎回この程度のボーナスでは生活水準が低下する一方です。」
- ・「2.4ヶ月という数字に納得感はありません」

これが未加入者の声である。会社の言う「一定数以上の声」とは会社にとって都合の良い一部の社友会の声であるのは間違いない。社内世論に立ち向かうために、生活実感・労働実感に踏まえた私達の要求を堂々と掲げていこう！そして、要求実現に向けて組合員と未加入者と対話を積み重ね、職場で働く社員の真実の声を要求として打ち出していく。

経団連は23春闘に向け、ベースアップを中心とした積極的な賃上げを呼び掛けているが、深澤社長は賃上げに慎重と答えるなど、出さないといわんばかりの姿勢を打ち出している。JR東日本は、第3四半期決算が増収増益で3期ぶりの黒字転換となったように、会社の支払い能力は十分にある。相次ぐ光熱費や生活必需品の値上げなどによって生活はより厳しいものとなり、賃上げがなければ組合員の生活はもう限界だ。このような経営姿勢や社友会の本質に立ち向かわなければ、私達の要求とかけ離れた回答が示されかねず、要求実現のためにはJR東労組への組織拡大を実現するしかない！23春闘のペア要求10,000円の満額獲得に向け、全組合員で組織強化・拡大を押しすすめ、23春闘勝利に向けて職場からたたかいをつくり出そう！

2023年03月01日  
東日本旅客鉄道労働組合  
千葉地方本部木更津支部

見解にダイレクトアクセス



### 23春闘に向けた見解

私達は、新型コロナウイルス感染症への対応や自然災害からの復旧作業など、要員不足という根本的な問題を抱えながらも休日勤務や突然の勤務変更に協力することで乗り越えてきた。さらに、施策に向き合い、系統を問わず各職場では安全・安定輸送の確保に向けて奮闘し、黒字に向けてコストダウンに努めてきた。また、増収の為に不慣れな企画業務にも挑戦し、遂に念願の黒字を達成した。

しかし、期末手当における会社回答は、JR東日本において夏季手当2.3ヶ月、年末手当2.4ヶ月+2万円、年間4.7ヶ月+2万円、JR東日本ステーションサービスは夏季手当2.05ヶ月、年末手当2.45ヶ月で年間4.5ヶ月、ジェイアールバス関東は夏季手当1.4ヶ月、年末手当1.6ヶ月で年間3.0ヶ月であった。この回答は必死の思いでグループ全体の黒字を達成した職場の努力に報いているとは到底思えない！

職場で働く者からは「もう我慢の限界だ」「過去最高の働き度で過去最低の回答」「賃金減少と物価上昇による生活苦でモチベーションが上がらない」「TV放送で大手企業が賃上げすると言いつつ、前向きに検討すると回答していく中で、JR東日本の社長だけが賃上げの重要性と回答していて本当に情けなくてガッカリした」という声がアンケートなどで多く寄せられている。

私達は21春闘で「昇給係数2、ペアゼロ」、22春闘で「昇給係数4、ペアゼロ」の会社回答を受けた。ペア要求実現と定期昇給（昇給係数4）の完全実施を実現させるため、対話やアンケートを通じて組合員や未加入者の声を集約し、「生活実感」「労働実感」をベースに要求を練り上げてきた。しかし、組合員の苦しい声とは裏腹に、「思ったよりもらえてよかった」という社内世論が一部社友会によって形成された。これは団体交渉で「一定数の声が集まっている」と会社が回答したことに現れている。しかし、多くの社友会員は意見を聞かれたことすら無く、利用されたと口々にして会社への不信感を募らせている。

先日実施した過半数代表者選挙においても、多くの職場で東労組の組合員が立候補し純子運輸区では勝利、佐倉運輸区では信任投票となった。その他の職場でも組合員数以上の票を獲得している。ここまでの経過は職場とJR東日本を良くしたいという多くの社員の真意に基づくものではないのか、この事からも春闘や期末手当に対する会社回答などを含めた今の経営姿勢に異議があると会社は重く受け止めるべきだ。

今、若手社員を中心に離職者が止まらない。離職を決めた理由は「希望しない転勤でキャリアビジョンが描けない」「会社が信用出来ずに不安と不満が積み重なった」「会社に対して不信感が募っていた」「今の会社に魅力がない」という事だった。

人気企業ランキングは年々順位を下げ、社内、社外から見ても魅力ある企業では無くなってしまった。今一度「JR東日本は一流企業だ」と胸を張って言うように23春闘勝利に向けて経営と社友会の本質を語り合いながら、JR東労組への組織拡大を実現する事で現実を支えていこうではないか。

「要求実現と組織拡大は両輪である」の意義を今一度捉え直し、全組合員の総力で組織強化・拡大を実現し23春闘勝利に向けて職場からたたかいを創り出そう！

2023年 3月 3日  
東日本旅客鉄道労働組合千葉地方本部 成田支部  
佐倉運輸区分会  
純子運輸区分会

見解にダイレクトアクセス



### 2023春闘のたたかいに向けた千葉支部見解

JR総連は1月27日、第45回定期中央委員会で2023JR総連春闘について、統一要求、統一闘争を確立し、連合方針の賃上げ相当分3%要求を踏まえてペア10000円を要求した。これは決して根拠の無い要求ではなく、物価高騰と生活向上のために必要である。2023春闘を取り巻く環境は、ロシアによるウクライナ侵襲の影響と長引く円安政策の失敗により、日本の消費者物価指数は4%と、昨年比から3倍以上の上昇となっている。そのため、必然的に家計の消費は圧迫され、組合員の生活は購買を控えるなど、これまで以上に苦しさを増している。長引くコロナ禍の影響もあり、生活の一部でもある期末手当は、低額回答を余儀なくされてきた結果、組合員の実質賃金は大きく減りしている。先行きが不透明な状況を憂い、将来を不安視する若手社員を中心に離職者は後を絶たず、人材の確保と雇用の定着はいまや労使共通の課題である。「賃上げ要求」とは、組合員の生活向上分を踏まえて算出すべきものですが、連合が掲げた3%は、現実的には物価上昇分に依拠した要求といえる。

会社は春闘交渉に入る前に「初任給特別措置の実施」を提案しました。「成長を担う人材を確保し働きがいを高めていくため」と理由を述べていますが、内容は入社4年目までの限定的な措置であり、「ペアを実施」しなくては根本問題の解決にはなりません。日本の賃金はこの30年間、ほぼ横ばいで上がっていません。私たちの平均賃金は20年前に686万円だったのが現在は640万円とまったく上がっていないのが現状です。

第3四半期決算も増収増益！3年ぶりの黒字転換！支払い能力は十分ある！全ての利益が黒字転換！逼迫する問題を抱えながら施策に向き合い、安全・安定輸送の確保に向けて奮闘し、黒字転換を果たしてきた。しかし、期末手当における会社回答は、JR東日本において夏季手当2.3ヶ月、年末手当2.4ヶ月+2万円であった。この回答は黒字を達成した職場の努力に報いておらず、組合員からは「もう我慢の限界だ」「過去最高の働き度で、過去最低の回答」「賃金減少と物価上昇による生活苦でモチベーションが上がらない」「支払い能力が十分にあっても、出せるものも出さないのが経営姿勢だ」「ダンベル上げに賃金上げ」「紹興酒を飲まさないで要求を呑み」など、怒りに満ちた声が各職場の総括を経て千葉支部に寄せられている。

本日3月7日におこなわれた第2回交渉において、黒字化を達成したという組合側の見解とあくまで黒字を確保したに過ぎないという会社側と対立した。しかし目標額は会社が一方的に決めたものであり私たちはこれまでも最大限の労働力を提供して黒字化を達成してきた。また一方で会社は各種効率化施策で社員個々の業務量は減少していると言いつつ、各現場ではむしろ社員の減少や失職等早に降りてくる施策により業務量は増大してきている。

21春闘で「昇給係数2、ペアゼロ」、22春闘で「昇給係数4、ペアゼロ」だった。今回の第2回交渉において私たちは21春闘での削減分の支給も求めたが、会社は昇給係数削減分を支給するつもりはないと回答してきた。ペア要求実現と定期昇給（昇給係数4）の完全実施を実現させるため、対話やアンケートを通じて組合員や未加入者の実態把握と議論を展開し、「生活実感」「労働実感」をベースに要求を練り上げ、経営姿勢に立ち向かってきた。しかし、組合員の苦しい声とは裏腹に、「思ったよりもらえてよかった」という社内世論が社友会によって形成された。これは、会社が団体交渉で「一定数以上の声が集まっている」と回答したことに現れている。しかし、多くの社友会員は意見を聞かれたことすら無く、利用された口々にしている。この社内世論に振り回されていくために、私たちの要求を堂々と掲げ、要求実現に取り組んでいくのではないかと。そのために全組合員と未加入者の対話を積み重ね、本場の要求の声を打ち出していこう！

経団連は23春闘に向け、ベースアップを中心に積極的な賃上げを呼び掛けている。しかし深澤社長は経済団体の新年祝賀会の場でマスクから賃上げの考えを聞かれ、出席した11社の中で唯一賃上げに慎重と回答した。JR東日本の消極的姿勢が露呈した。その一方でJR東日本の内部留保は過去最高を記録している。

このような経営姿勢や社友会の本質に立ち向かわなければ、23春闘においてもペアゼロや定期昇給のカットなど、私たちの要求とかけ離れた回答が示されかねない。そのためには、経営と社友会の本質を語り合いながら、JR東労組の組織拡大を実現しなければ現実を変えることは出来ない。「要求実現と組織拡大は両輪である」の意義を今一度捉え直し、全組合員の総力で組織強化・拡大を実現し、「物価上昇と組合員の生活実感に基づく賃上げ要求獲得」と「組合員の声を要求に高め、安全・健康、ゆとりを実現するために、要求に込めた思いをお互いに確認し合う」とともに23春闘勝利に向けて第3回交渉まで全職場・全組合員でたたかい抜こう！

2023年 3月 7日  
JR東労組千葉支部執行委員会